
ゲームセット

勝利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲームセット

【コード】
N5840U

【作者名】
勝利

【あらすじ】
俺達の高校野球は、ゲームセットを迎えた。

何をしなくてもわきの下にじつとりと汗が滲む日本の夏に、拓也は嫌気がさしていた。力強い日光は部屋の中に直接当たらないものの、生暖かい空気は扇風機一台のみでは冷えてくれそうにない。クーラーなどという贅沢なものは拓也の部屋に設置されていないため、今までの夏はこれだけで我慢してきた。そして今年も我慢するしかなかった。ただ、去年と状況が異なっているのは、拓也が高校三年生になって初めて勉強机に向かっているということだった。

机には昨日買ってきたばかりの数学の参考書が広がっていた。小中、高、と野球部に所属し、毎日部活に明け暮れる日々を送ってきた拓也にとつて、毎日の学校の授業はそれこそ日頃の疲れを取り除くための睡眠時間であった。その拓也がこうしてシャーペン片手に参考書と睨めっこしている理由はただ一つだ。拓也にとつて勉強以外に打ち込むことが無くなってしまったのである。

「……ん？　って円周率だろ？　何で角度に使われてんだ？」
本の内容が理解できずに苛立つ。それを含んだ呟きは、外で響き渡るアブラゼミの鳴き声でかき消された。下手くそなペン回しを繰り返しながら何度も同じ文章を目で追うものの、日頃の積み重ねた学力が無く基礎が抜けている拓也にとつて、到底理解できない内容だった。

大きくため息を一つ溢し、拓也は勢いよく本を閉じてその上に伏せた。今は夏休み真っ只中で学校に行く機会はない。自ら足を運んで数学の先生に質問するのがいいだろう。そう思い、自力で理解することを諦めた。

そのまま頭の中で、自分に残されている時間を逆算していく。当面の目標は国公立大学を受験する為のセンター試験。それは毎年一月中旬に行われる。今が七月の終わり頃だから、拓也に残された時間は約五ヶ月。そして、国、数、英、理、社の五科目を勉強しなけ

ればならないので、五で割ると、一教科あたり約一ヶ月残されている。これだけあれば充分だろう。当然一ヶ月で間に合うはずがないという危機感が頭の隅に浮かんでくるが、拓也はどこからともなく湧いてくる底知れぬ安心感に包まれていた。

とりあえず休憩を取ることしよう。そう考えた拓也は机から離れてリモコンを手に取り、未だアナログ放送しか映らないブラウン管のテレビの電源を入れた。一番最初に映ったのは、甲子園の地方予選だった。応援団の軽快な掛け声と吹奏楽部の響かせる音色が拓也の部屋の中を包む。反射的に拓也はチャンネルを切り替えていた。別の局はどれもお昼のワイドショーか、興味の無いドラマの再放送だった。そして、チャンネルが一周してもう一度甲子園予選が映る。小さく舌打ちをし、拓也はテレビに接続されているゲーム機の電源スイッチを押した。

ちょうど三日前、拓也は球場の応援スタンドに立っていた。直射日光を浴びたグラウンドは熱気がこもり、気温は四十度近くまで上がっていた。それにも関わらずグラウンドに立つ選手達は機敏に動き、応援側も頭が酸欠になりそうなほど叫んで仲間を激励する。球場は大いに盛り上がっていた。背番号を貰えなかった拓也は、同じくベンチ入りから外されたメンバーと共にスタンドで応援に徹していた。声を張り上げる一方で、拓也は自らの経歴を顧みていた。

小、中学校ではチームのエースピッチャーとして活躍していた。その後地元の高校に進学し、野球部に入部した時から投手として練習を続ける。高二の秋の時点でエースとまではいかないものの、二番手ピッチャーの位置に着くことができた。しかし、順調にシーズンオフである冬のトレーニングに差し掛かろうとした時、拓也は腰

を痛めた。基礎練習に参加することができず治療に専念し、なんとか春を迎える直前に復帰したものの、冬の練習を乗り越えた他の部員との差が生まれた。持病となってしまうた腰痛との兼ね合いもあり無理もできず、拓也には春から夏にかけてその差を埋めることができなかった。気付けば、ベンチにすら入ることすらできなくなっていた。こうして、夏の甲子園予選で、拓也はスタンドで応援する他何もできなかった。

プロでもアマチュアでも、怪我は一番回避しなければならぬことだ。しかし、専属のトレーナーまでもを付けて念入りに怪我への対策を行っているプロであっても故障することはある。全て自己管理しなければならぬアマチュア。ましてや高校生の拓也が、怪我を負ってしまうのは無理もない話だ。つまり、端的に言えば運が悪かったのだ。そして、運が悪かっただけでこの高校三年間を棒に振った拓也はやりきれない思いでこの試合を眺めていた。今まさに、拓也のチームは負けようとしていた。

九回裏、四対三。一点ビハインドで迎えた最後の攻撃。あとアウトを三つ取られれば、拓也達の夏はあっけなく終わる。しかし、拓也は信じていた。ボールカウントや選手のオーダー表が表示されているバックスクリーンをちらりと見やる。打順はちょうど一番からだ。点を取りに行くには絶好の打順である。無意識のうちに、六番に記された背番号二の文字を眺める。上手く出塁できれば、必ず打順が回ってくるはずの六番。あいつなら、慎之介ならきつと

携帯の着信音。はっと我に返る。拓也は充電器に差したままの携帯を急いで掴み、誰からの電話なのかも確認せずに通話ボタンを押した。

「もしもし」

『よっ』

慎之介の声だった。思わず目を見張った。三日前の試合の後、慎之介とは音信不通だった。その慎之介が突然電話をかけてくるとは、どういふ風の吹き回しなのだろう。

「……慎。お前、メールとか送ってたから返事ぐらいしろよ」

他にも言わなければならぬことがあった気がした。だが拓也は真っ先に毒を吐いていた。吐いた瞬間、しまったと反省する。

『いやー悪い悪い。返しそびれてさ』

からからと調子の良い笑い声が聞こえる。いつもの慎之介だった。拓也はほっと胸を撫で下ろした。

『でよー、拓也。お前今何してんの？』

拓也はちらりとテレビの画面を見て返答につまった。画面上では、拓也の育てた野球選手が甲子園を目指して猛特訓していた。すぐさまリモコンを掴んでゲームの音量を落とす。

「……やることねーから勉強してた」

『そっか』

何故こんなことをしているのだろう。安っぽい嘘をつきながら、拓也は心の中で舌打ちをした。

「慎は？」

何気なく問うてから、少しの間があった。

『……俺も勉強してた』

「そっか」

それから、電話の向こうから何も声が聞こえなくなった。拓也が何を聞こうか迷っていると、先に慎之介が喋り始めた。

『ずっと勉強してて気分転換したいからさ、キャッチボールでもしねーか？』

「ああ、それで電話してきたと」

『そっ。そういうこと』

拓也には特に断る理由もなかった。むしろ外に出て軽く体を動か

したかったところだ。屋外にいただけで体力が削られるほど夏の昼間は暑いが、部活で慣れている拓也達にはあまり関係のない事だった。

「別にいいよ。俺も勉強飽きてきたし」

『じゃあいつもの公園な』

「わかった」

別れの挨拶を手短に済ませると、拓也はすぐさま通話を切った。そしてゲーム機の電源を落とすと、机の隅に置いておいたグローブとボールを掴んで部屋を飛び出した。

球場は大いに盛り上がる。強制的に連れてこられた暑くて気怠そうな生徒達も、終盤の競り合いに興味を示し始めた。応援団の掛け声に合わせてグラウンドは風と共に揺らぐような、そんな不思議な気分を拓也は味わっていた。そして拓也の視界には六番の慎之介が右打ち用の打席に入る瞬間を捉えた。

スコアボードをちらりと見る。四対三。まず一番がボール気味の球を打ちに行つてサードゴロに倒れる。次の二番は冷静に球を見極めてフォアボールをもぎ取ると、三番は犠牲バントで四番に繋ぐ。この時点でニアウト、ランナー二塁。四番のヒット一本で同点に持ち込める位置にランナーを進めた。しかし、九回まで投げ続けた相手投手の疲労が出てきたのか、四番、続く五番にも四球を与え、気が付けばニアウト、満塁。その場面で六番の慎之介に打順が回ってきたのだ。

拓也は応援スタンドで声を張り上げながら、慎之介の姿をじっと見た。慎之介は打席に入るとまず一回屈伸をし、バットで左足のスパイクを小突いて土を落とす。ヘルメットのつばを触りながら片手

で大きくバットを一回転させ、両手で握り大きくゆったりと構える。この構えるまでの動作は、慎之介が行っている“ジnkクス”だ。構える前にこれらを順番通り行うことで、慎之介は自分自身に必ず打てる暗示をかけ、リラックスさせているのだ。この一連の動作を見た拓也は安心した。今の慎之介は冷静である。

熱気のもるマウンド上に立つ相手の投手は、深呼吸でゆっくりと肩を上下に動かしていた。遠目で見てもかなり疲弊していることがわかる。拓也は　球場にいる全員が、固唾を飲んでピッチャーを見る。やがてゆっくりと投球モーションに移った。

一球目。ピッチャーが放った球は、キャッチャーが立たなければ捕れないほどストライクゾーンから大きく外れた。球場がどよめく恐らく球種はカーブもしくはスライダーで、手元が狂いすっぽ抜けただろう。もし慎之介にフォアボールを与えると、ランナーは満塁なので押し出しで一点追加　つまり同点となり、拓也達の負けが消える。加えてそこから逆転の可能性も秘めている。スタンドから野次や激励の言葉が飛び交った。たまらず捕手は残された最後のタイムを使い、試合を止めて投手に駆け寄った。グローブで口元を隠しているので何を話しているのかはわからないが、大体想像はつく。

『拓也、あとアウト一個だ。焦んなよ』

慎之介なら、こう言ってくれるだろうか。もしかしたら拓也をリラックスさせるために、今日の晩御飯の話をしてくれるかもしれない。疲労や暑さで頭の中が一杯だった拓也に、間の抜けた話で冷静さを取り戻させ、何度もピンチから救ってくれた慎之介には感謝している。その慎之介は今　チャンス、いや、ピンチかもしれないベンチや応援席からの期待が、慎之介を圧迫している気がしてならなかった。今の拓也なら、何と声をかけることができるだろうか。

キャッチャーが元の位置に戻り、試合が再開された。注目の二球目。外角低めいっぱい球が決まる。ストライク。相手側のベンチやスタンドは大いに盛り上がった。だがこれは計算の内だ。崩れか

けている相手に対して、ストライクだからといってむやみに振りに
いってはならない。相手が持ち直してきたようなら気を引き締めて、
甘く入ってきたボールを待つのだ。

ふと、拓也は違和感を覚えた。暑さで頭がぼうつとして見逃した
のかも知れない。そんな言い訳が頭をよぎったが、次の瞬間に拓也
は生唾を呑み込んでいた。三球目。もう一度同じコース、外角低め。
しかし今度はやや甘めに球が来る。それを慎之介は見逃した。スト
ライク。またもや歓声が上がる。慎之介は大きく息を吐き出して打
席から外れた。カウントは二ストライク、一ボール。あとストライ
ク一つ取られれば三振となり、その時点で拓也達の夏は終わる。そ
の重みを感じてか、スコアボードに二ストライクの表示がされた瞬
間、拓也側のベンチとスタンドは静まり返った。負けるかもしれない
い。その不安を打ち消すかのように、応援団は最後の力を振り絞
って声を張り上げた。それに触発され、生徒たちも大声で叫ぶ。

慎之介は再び打席に入った。そして、両手でバットを握り大きく
ゆったり構える。拓也はめまいがした。間違いない、慎之介は焦
っている。あのゆつたりとした構えは見せかけだ。毎回行う“ジン
クス”を、二球目から行っていないのだ。この球場にいるいつたい
何人が、慎之介の異変に気付くだろうか。少なくとも拓也は気付い
た。だが、何もしてやれなかった。駆け寄ることも、微笑みかける
こともできない。距離にして約数十メートルがこんなにも遠いもの
だと今まで思ったことなどなかった。

「慎……大丈夫だ、俺がいる。今お前が打てなくても、次の打順が
回ってくる時まで一点も取らせはしない。だから安心して振って
こい」

それは、中学生の頃チームのバッテリーとして組んでいた慎之介
に対し、拓也がかけていた言葉だった。そして拓也は応援スタンド
に立ってその言葉を呟いた。周りにいる誰にも聞こえないようにし
て。

キャッチャーからのサインを確認したピッチャーの投球モーショ

ンが始まる。折りたたまれた右腕から弾かれるように飛び出す白球。肘が伸びきる瞬間、人々は呼吸を忘れた。四球目。内角高め。慎之介が最も得意とするコース

拓也は公園のベンチに座って慎之介を待っていた。町はずれにぽつんと存在するこの小さな公園は、言ってしまうえば遊具などないないただのさら地である。二、三人で座れる横長の背もたれがないベンチが置かれているだけで、地域住民からの人気あまりないところだった。小、中と一緒に野球をやっていた拓也と慎之介がキャッチボールをする場所といえば必ずここと決まっていた。夏の日差しが拓也を照り付け、穏やかに流れる風が地面に点在する雑草を撫でた。もう既にこめかみからじわりと汗が滲む。練習用のアンダーシャツの胸元も、汗で少し色が変わり始めた。まだ来ないのか、と心の中で舌打ちをしながらポケットの携帯を取り出して開く。メールは来ていない。ため息と共にポケットへねじ込む。

「よう、悪い。遅れた」

公園の入り口から聞き慣れた声。その方向に振り向くと、慎之介の姿が視界に入る。拓也よりも身長や肩幅が一回り大きく、丸刈りにした坊主頭や二重瞼が作る大きな瞳が体躯の大きさを来る圧迫感を打ち消して、相手に柔らかな印象を与える。そのせいか女子にもよくモテる。簡素な白のTシャツに短パンという服装で登場した慎之介は、頭をがりがり掻きながら拓也の傍へ近寄った。

「よう慎。遅刻の原因は？」

「んあー、道に迷ったお婆ちゃんを案内していたらお婆ちゃんが産気づいちゃって。百十番に電話してた」

「警察もびっくりだな」

最初から嘘を付くことはわかりきっていたので、拓也は笑いながら合いの手を入れる。慎之介は冗談を言う瞬間既にやにや笑っていた。すつと真顔に戻った拓也は、ベンチから立ち上がった。

「んじゃやるか」

拓也の言葉に、慎之介は返事をしないまま広い場所へ歩みを進めた。拓也も最初は慎之介から数歩離れた場所に立つ。拓也は持ってきたグローブを左手にはめて、ボールを右手で握った。慎之介もキャッチャーミットを左手にはめる。まずは近くでゆっくりとボールを投げ合い、肩が慣れてくると拓也が一球ごとにゆっくりと後ろへ下がっていく。やがてマウンドからホームベースまでの距離ぐらいまで離れると足を止めた。そのまま交互にボールを投げる。

「拓也、腰は大丈夫か？」

慎之介がボールを投げながら話題を振ってきた。そういえば先程から何も喋っていないかった。別に気まずいわけではなかったが、そこまで気遣いがいかなかったのも事実だ。拓也は向かってきたボールを捕り、慎之介に投げ返した。

「キャッチボールぐらいなら大丈夫」

「ふーん」

慎之介はボールを捕ると、曖昧な相槌のみで投げ返す。拓也はそれを受け取るものの、次の言葉をなんと返せばいいのか少し迷った。「全力で投げるのはまだちょっと怖いな。十球が限界かも」

「ふーん」

絞り出した言葉に、再び慎之介は興味の無さそうな返事。元からこの話題を広げる気など全くもってなかったのだろう。少し苛立ちを感じた拓也は、ぶっきらぼうに話題を変えてみる。

「そういえばさお前、三日前の試合が終わって音信不通だったよな。何してたんだよ」

ボールを投げる力を思わず強くしてしまった。キャッチャーミットを鳴らす音が幾段か強くなる。慎之介は球を取る瞬間に表情が強張るも、すぐさま柔らかい笑みを浮かべる。

「せっかく部活が終わったからよ、久々の休みってことでブラブラしてた。やっぱり夏休みはだらだら生活するのが一番だよな」

「かっかっか、と調子の良い笑い声をあげて慎之介はボールを投げた。拓也はそれを捕りながら、眉をひそめた。長年の経験からいくと、慎之介は何かを隠そうとしている。確信はないが、拓也は直感的にそう感じた。

「なあ、三日前の試合、お前の最後の打席。まだ覚えてるか？」

「手元のボールを投げ返さずに、拓也は神妙な面持ちで切り出した。「そりゃ覚えてるけど」

「四球目。インハイに直球が決まった。お前の三振で、俺達の夏は終わった」

「遠くからよく見えたな。そうだよ、見事に打てなかった」

「打てなかった。それは違う。打たなかった、だろう。」

「インハイ。内角高め。お前が最も得意とするコース。ややボール気味でも強引に振りにいって外野まで飛ばすお前が、どうしてあの直球を。どうして見逃したんだ」

あの試合。三日前の試合。九回裏、慎之介は見逃し三振をした。

慎之介は打席に立ってから、一度もバットを振らずに三振した。拓也にはどうしても理解できなかった。

「お前もキャッチャーだから少し考えればわかるだろ。相手の球種はストリート、カーブ、縦に落ちるスライダー。一球目で手元が狂いボールがすっぽ抜けてた。恐らくカーブかスライダー。その時相手は満塁という状況だけに、これ以上変化球を投げるリスクを負うよりも直球で打たせにいった方がいいと判断したはずだ。だから二球目、三球目はストリートだった。四球目に意表を突いて変化球もありだったが、後逸の危険性を考えれば、ピッチャーの俺なら真っ直ぐを投げたい。あの時も、相手のピッチャーはサインに首を振らなかつた」

離れた位置から拓也は声が届くように強くはつきりと喋った。そして、一拍置いてから手元のボールを投げ返した。慎之介はそれを

受け取ると、口をきゅつと結んだ。それが緩むと同時に、言葉を発した。

「確かに、冷静に考えれば、四球目にストレートが来ることぐらい想像はついたな」

相槌というよりは、同意だろうか。不思議な返答をして慎之介はボールを投げた。拓也はボールを捕り、次の言葉に悩んだ。何も考えずにボールを投げようとした瞬間、慎之介が口を開いた。

「一球目の暴投があつただろ？」

拓也は投げる動作を中断し、慎之介の方に向き直った。慎之介はやや俯きながら、唇を震わせる。

「俺さ、あの時……もしかしたら俺が打ちに行くよりも、フォアボールを狙った方が良くないかって思ったんだ。だから二球目は様子を見た。二球目は外角ぎりぎりに真っ直ぐが飛び込んできて、ストライクを取られた。普通ならここで姿勢を切り替えて、狙った球はどんどん打ちに行くべきなんだけど……俺さ、そこで思ったんだ。『もしかしたらまだコントロールが定まってないのかもしれない。次はボール球かもしれない』って。最悪だよな、その時点でもう俺には打つ気がなかつたんだ」

あの時スタンドにいた拓也の嫌な予感は当たっていた。しかも、慎之介自身は三球目から意識が逸れていたと言ったが、拓也からすれば既に二球目から打ちに行く気迫が感じられなかった。自分でも気づいていないのだろう。頭では冷静を装っていても、体が硬直し思い通りに動いていなかったのだ。

「三球目で追い込まれた時に、ようやく俺は我に返った。んで、目の前に迫った敗北に怖気づいた。球種がどうとか、次の配球がどうとか、そんなの考えちゃいなかった。呼吸は乱れる、足はガクガク、頭ん中は真っ白。今思い出しても最悪だ」

先程の“冷静に考えれば”という慎之介の返答に、真意が隠れていたことを拓也は悟った。やるせない思いがこみ上げ、拓也はゆっくりと慎之介の前へ歩み寄る。慎之介はまだ下を向いて唇を震わせ

ていた。肩に手を置こうと拓也が思った瞬間に、慎之介は言葉を絞り出した。

「俺、もう野球辞める」

動き出した腕が硬直する。言葉の意味を頭の中で何度も反芻し、噛み砕く。大きく息を吸って、吐く。きつ、と視線を鋭くすると、拓也は勢いよく慎之介の胸ぐらを掴んだ。それにつられて慎之介の顔が上を向いた。視線は横に向いているものの、その表情に柔らかさはなかった。まるで目の前に死期が迫っているかのような、どこにも生きる気力が感じられない様子だった。

「あの試合が終わってさ、誰にも会わせる顔が無くて、ずっと一人だった。その時に考えたんだ。三年間やってきた積み重ねを一瞬で棒に振っちゃう俺が、野球を続けてもいいのかって。いや、俺は今までの野球人生を棒に振ったんだ。今から取り返そうだったって一筋縄にはいかないから、いつそのこと辞める方がいいのかもなっと思って」

何が野球人生だ。たかだか十七、八の少年が 言葉はこみ上げてくる。ただ、拓也にはそれを口にするだけの勇気と責任を持ち合わせていなかった。慎之介の顔を直視できず、今度は拓也が下を向いた。奥歯を噛みしめる音が生々しく響く。

「慎……」

蚊の鳴くような声だった。呼びかけが届いたかどうかはわからない。ただ、慎之介は拓也の次の言葉を待っているようだった。その雰囲気を押され、拓也は続けた。

「……振って……欲しかった」

“俺が無失点に抑える” 言えなかった。自分が試合に出ていない悔しさと不甲斐なさが、胸元へ一度に押し寄せてきた。あれだけ応援スタンドから声を大にして叫びたかった言葉を、互いの鼻がぶつかりそうなくらいの距離で、言えなかった。大きく息を吐き出して、拓也は掴んでいたシャツを放した。顔は下に向けたままだった。しばらく無言が続く。余計にでもセミの鳴き声が耳につく。先

に口を開いたのは慎之介だった。

「拓也、頼みがある」

どこか吹っ切れたような調子で、慎之介は切り出した。

「すっぱりと野球を辞められるように、悔いなく辞められるように、最後にお前の本気の球を捕りたい。十球もいらさない。一球だけでいい。全力で俺のミットに投げてくださいませんか？」

そう言っつて、慎之介はキャッチャーミットの捕球部分を拳で叩いた。パン、と軽快な音。拓也が本気で投げる前に、慎之介がいつも癖でやっていた動作。それは、キャッチボールから本気のピッチングへ切り替える合図でもあった。

拓也はその音を聞いて、奥歯に入れていた力を緩めた。すっと、顔を上げる。

「……一球だけだからな」

それだけ吐き捨てて、拓也は慎之介にくるりと背中を向けて再び距離を取った。マウンドからホームベースまで十八・四メートル。長年の染みついた感覚で、実際の距離と同じだけ離れる。振り返った時には、慎之介が中腰になってキャッチャーミットを構えていた。

真ん中。ストレート。合図をしなくても要求はわかる。慎之介を真正面にし、両手を顔の前に置いて拓也は構えた。グローブから香る保革剤の匂い。毎日傍で漂っていたその匂いは、もはや懐かしい香りへと変わっていく。その瞬間を、拓也は肌で感じていた。

左足を一步後ろに引いて、両手を頭の上へゆっくりと持ち上げ振りかぶる。一つ深呼吸。左膝を上げて体重を右足に乗せると同時に体を捻る。そして瞬時に左足を慎之介の方へ力強く踏み込む。後ろへ引き伸ばした右腕を耳元で折りたたみ 全身で生み出した力を込めて、風を切り裂くようにボールを投げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5840u/>

ゲームセット

2011年7月4日03時11分発行